

空白を埋めるだけでは終わらない

農学教育のあり方を真正面から考えたことがなかった。そんな忸怩たる思いを強くした。1年前のことである。当時は福島大学の食農学類の新設に向けて、文部科学省の設置審への提出書類の最終版を作成しており、とくにディプロマ・ポリシー(公式の日本語訳は「学位授与の方針」だが、人材養成の方針と言い換えてもよいだろう)の文章を練りながら、農学の教育について冒頭のような感懷を抱いた次第である。ひとこと付け加えておくと、自分が授業を担当した科目、あるいは専門である農業経済学の教育に関しては、それなりに真剣に取り組んできたつもりではある。けれども、農学教育の全体像について、みずから進んで体系的に吟味する機会はなかったと言ってよい。

自分から積極的にとは言い難いものの、設置審向け文書の作業によって、農学教育の理念と構成を真面目に考えることになった。いわばゼロからスタートするわけで、全体像の設計が不可欠なのである。以下ではディプロマ・ポリシーに触れながら、福島大学の農学教育がめざす特色について紹介させていただく。すぐにご理解いただけるように、特段の新奇性があるわけではない。少し力んで申し上げるならば、農学教育の原点に立ち戻るといったところだろうか。

人材養成の方針として掲げたのは、実践性・学際性・国際性・貢献性の4つの能力の涵養である。今回はこのうち実践性と学際性に絞って、その意図するところをお伝えすることにしたい。まずは実践性であるが、課題解決志向と言い換えてもよいだろう。もともと農学には課題解決への貢献を第一義とする学問として発展してきた歴史があり、その原点を大切にしようという趣旨である。とくに重視しているのは、学生が農林業・食品産業や農村社会の現場に触れ、具体的な課題に向き合うことである。

入学直後から農場実習が行われることも、実践性の理念に基づいている。加えて、鉄は熱いうちに打てとの思いもある。何と言っても、フレッシュマンの高い意欲を大切にしたい。課題解決志向の醸成という意図は、カリキュラムでかなりのウェイトを占める農学実践型教育にも込められている。学生は2年後期から1年半にわたって、県内の市町村の現場に通うことになる。現時点では9つの市町

村が対象であり、それぞれが直面している課題の解決に向けて、学習と研究を深めていく。実は、教員選考のプロセスでも、現場の課題と密着した教育方式に積極的に取り組むことの可能性をひとつの判断材料としたつもりだ。

学生は2年の後半から専門コースに所属する。すなわち、食品科学・農業生産学・生産環境学・農業経営学の4つのコースである。このうち生産環境学はやや耳慣れないかもしれないが、主として森林科学と農業農村工学から構成されている。4つのコースに配属され、さらに卒業論文に向けて研究室に入ることによって、学生は専門性を深めていく。その分野に固有の用語や思考方法を身に付けることにもなる。専門性の深まりは、化学、生物学、物理学、経済学などの言語体系に分かれていくことだと言ってもよい。農学系の学部は小さな大学などと表現されるように、基礎となるサイエンスが多彩なのである。であれば、なおのこと学際的な連携が大切になる。ここにも食農学類の教育理念がある。

この点を理解するための身近な例として、フードチェーンに沿った科学の流れがある。最上流には水資源涵養に貢献する森林科学、川上には農地・農業用水を支える農業工学、中流には育種や栽培法などに取り組む生産農学、そして川下には農産物加工に革新をもたらす食品科学といったかたちである。ここで決定的に重要なのが、学際的な連携の力にほかならない。フードチェーンの構成要素間の相乗効果こそが質・量ともに高いレベルの食の提供につながるからである。

学際性の涵養は、それぞれの専門領域の用語や思考法について、ほかの領域の人々に噛み砕いて伝えることから出発する。コミュニケーション能力の醸成である。さらに、他の専門領域との対話から刺激を受けることで、自身の専門分野の広角的な理解にもつながるはずだ。このことを伸び盛りの若者たちに実感してもらいたい。そんな思いもある。

東北6県で唯一農学系の学部が存在しなかった福島県。いささかの気負いとともに、機会あるごとに申し上げてきたのは、農学教育の空白を埋めるだけで終わってはならないということ。小さな食農学類ならではの持ち味を発揮・発信できるように努めてまいりたい。

(福島大学食農学類準備室 教授 生源寺眞一・しょうげんじ しんいち)